# RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

## 第12回:創作落語『宇宙臣蔵』

ええ、しばらくの間おつきあいを願います。最近、NHKの大河ドラマで忠臣蔵をやってるもんで、また忠臣蔵人気が高まってきたようですが、あの四十七士の仇討ちというお話は永遠に日本人の心をとらえてはなさんのでしょうな。

「こんにちわ」
「ああ、おまはんかいな、待ってたんや。こっちあがり。えらい遅かったやないか」
「へえ、あんたから呼び出し受けたんで急がなあかんと思て、ロケットタクシーに乗りましてんけど、運転手が『お客さん、ワープでいきましょか、それとも下走りましょか』言いよるさかい、つい『早いほうでいってんか』と言うてしまいましてん。そしたら、ついてから見たら銭が足りまへんねん。運転手、えらい怒りよりましてな、真空にほりだす、言うもんやさかい平謝りに謝って、やっと解放してもらいましたんや。なんやかんやで遅なってしもてすんまへん。で、何か用事ですか」
「おまえを呼びにやったのは他でもない。また、おまえが最近遊んでるちゅうことを聞いたもんでな、ちょっと小遣い儲け、銭儲けをさせたろうと思てな」
「ほたら何でっか。わたいが遊んでるゆうのを聞いて、小遣い儲けさせたろと言うてはるんですか。こら、ありがたい。最近、何やってもうまいこといかんので日干しになってまんねん。で、その小遣い儲けちゅうのは」
「忠臣蔵知ってるやろ」
「忠臣蔵ちゅうと」
「おまはん、忠臣蔵知らんか」
「知らん知らん」
「こら困ったな。忠臣蔵知らなんだら、ちょっとこの仕事はでけんぞ」
「そんな殺生な。せっかくの小遣い儲けでんがな。何とかなりまへんか」
「うーん、そやな。この仕事は忠臣蔵に詳しいもんでないとつとまらんねやが……」
「ほんならこうしましょ。その忠臣蔵とかいうのがどういうもんか、かいつまんでわたいに教えとくんなはれ」
「そやな。他にこんなアホな……いや、こんなええ仕事を引き受けそうなものもおらんし、それで手え打とか」

それからこの男、甚兵衛（じんべ）はんに忠臣蔵というものがどういうものであるかをこんこんと教えてもらいます。何しろ、時代は２×××年でございます。なんぼNHKががんばっても、中には忠臣蔵がどういうものか知らないかたもあったようで……。もっともNHKのやつはいつになったら松の廊下の刃傷になるのかさっぱりわかりませんが……。

「その事件ちゅうのはよっぽど昔の話ですか」
「そらそや。まだ、日本という国が地球にあって、江戸というところが日本の中心やった頃の話やからな。時の将軍、徳川綱吉公というかたが、生類あわれみの令というのを出して、庶民がえらく迷惑したというな」
「そら迷惑もしまっしゃろ。脂身ばっかり食べてたら、太ってしまいますからな。うちの嫁はんも最近むちゃくちゃ太ってきよりましてな。わたいがこのとおり太ってますやろ。夫婦喧嘩なんかしたら、もう大変ですわ。わたいが『この脂すまし！』いうと嫁はんが『何やと、この皮下脂肪弁慶！』わたいが負けじと『やかましい、この脂一肪ず！』いうと嫁はんも『どっちがやかましねん、この脂ハム！』最後はどつきあいですわ。その結果、必死の手当ての甲斐なく脂肪、なんちゃって」
「おまえ、何を言うてんねん」

# RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

## 第 12 回:創作落語『宇宙臣蔵』

「いや、生類あぶらみの令」
「あぶらみやない、あわれみや。この綱吉公に勅使御馳走役(ちょくしごちそうやく)という大役を任された浅野内匠頭(たくみのかみ)、このかたは、播州赤穂藩五万三千五百石の大名やけどな、この内匠頭が、高家(こうけ)筆頭の吉良上野介(きらこうずけのすけ)にいろいろとはずかしめを受けた」
「はずかしめ？　裸にして縄で縛って浣腸するとか」
「おまえ、どういう思考しとんねん。そうやない。悪口を言うたわけや」
「上野(こうずけ)だけに、ずけずけ言うたな」
「『そういえばおまえさんの顔がだんだん鮒に似てきた。鮒じゃ鮒じゃ鮒ざむらいめが』てなことを公衆の面前で言うたわけやな」
「それがはずかしめですか？　その内匠頭いう人が鮒に変身したゆうことでしょ。これ、いわゆる一つのメタモルフォーゼ」
「ちがうちがう。ほんまに鮒になったんやないねん。鮒に似てると言われただけや」
「そんなことで怒るんやったら、うちの嫁はんなんか、チョウチンアンコウに似てまっせ。子供二人もアンコウに似てまねん。アンコウが三人揃て、三アンコウツモドラー」
「何を言うとんねん、黙って話を聞かんかい。はずかしめを受けた内匠頭は、ついに堪忍袋の尾が切れた、というわけで、江戸城内の松の廊下というところで刃傷をなさった」
「刃傷ちゅうと」
「上野介を刀で斬りつけはったんやな」
「やっつけましたんか」
「残念ながら怪我をさしただけや」
「あほやなあ、これやから素人はいややねん。やる時は、腰骨のあたりに両手で小刀を構えて、体重を乗せて、一思いにぐさっと……とどめをさすことも忘れずに」
「怖いわ、おまえは。内匠頭もがんばったんやが、梶川与惣兵衛(よそべえ)という力の強い侍に取り押さえられてしもたんや。芝居やったら、ええとこやで。『殿中でござる。殿中でござるぞ』『お放しくだされ、梶川殿。武士の情けじゃ今一太刀……』額を斬られた上野介はその場に尻餅をついた」
「なるほど。電柱で殴られたな」
「電柱やない。小刀や」
「でも、電柱でござる……」
「べたな洒落を言うな、あほ」
「吉良がキラれた、いうのはどうです」
「どうです言われても……」
「あ、そうか、その額の傷があとあと物を言いまんねんな。この眉間に冴える三日月型。天下御免の向こう傷。高家筆頭、吉良上野介、人呼んで旗本退屈男。ぷっはははははは……」
「黙って聞け言うとるやろ。神聖な江戸城内を血で汚した咎により、内匠頭は切腹申しつけられた。その時の有名な辞世の句が、『風さそう花よりもなお我はまた……』」
「それにつけても金のほしさよ」
「赤穂藩はお取り潰し。一方、吉良はおとがめなし。この不公平な判決に怒ったのが内匠頭の家来たちや」
「何で怒りまんねん」
「昔から、武家では喧嘩両成敗が原則やからな」
「何です、その両成敗いうのは。ああ、わかった。両性とセックスできるバイの人のことでっしゃろ」
「あほなこと言うな。喧嘩をした場合は双方に咎めをするのが喧嘩両成敗。ところが幕府は吉良を罰せず、浅野家だけを罰したわけや。幕府は、赤穂城の明け渡しを迫った。お家が取り潰されたら、家臣は皆、浪人せなあかん。ところが、浅野内匠頭は、名君として家臣一同に慕われとった」

# RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

## 第 12 回:創作落語『宇宙臣蔵』

「人情にあつい人やったんやな。それで、殿中で人情したわけや」
「黙って聞けんか、おまえ。赤穂藩士たちはこのまま明け渡すぐらいなら城を枕に討ち死にしようとした。このままやと、赤穂浪士と幕府の決戦になってしまう。そこで登場したのが……誰やわかるか」
「さあ……明けわたし、いうぐらいやから、私ですか」
「わけのわからんこというな。なんで私が登場せなあかんねん。忠臣蔵の主人公、家老の大石内蔵助や。名前ぐらい聞いたことあるやろ」
「全然。でも、それってたいへんな仕事でんなあ」
「おまえにわかるか」
「馬鹿にしなはんなや。それぐらいわかりまんがな」
「そのとおりや。取り潰しにあおうという藩をまとめていくのは並大抵やなかったやろなあ」
「それで過労いいまんねんやろ」
「そんなことやろうと思たわ。内蔵助は、家臣一同を集めて、幕府と一戦まじえるのは得策やない。我々の目指すは、あくまで吉良上野介を討って主君の無念をはらすことや。城を明け渡し、浪人したあとで、志を同じくする者同士結束して、何が何でも吉良を討つんや、という内蔵助の呼びかけに賛同したのが、四十七人。これが、いわゆる赤穂浪士とか四十七士とか赤穂義士といわれとるやつや。聞いたことあるやろ」
「知りまへんなあ」
「大石を頭に、彼を尊敬する四十七人の侍が集まったわけや」
「浪士だけに、労使関係も良好ですな」
「こういうことは秘密を守らんと、吉良側に覚られたらおしまいや。四十七士は、親兄弟にも仇討ちのことはあかしませんという誓いをたてて、連判状を作った」
「連判状？」
「それぞれが名前を書いたリストみたいなもんやな」
「忠臣蔵だけに、シングラーのリスト」
「名前の下に、血判を押すんや」
「血判て？」
「親指を切って、血のついた母印を押すことや」
「わあ、こわ。わあ、こわ。血をインクがわりにするわけですな。でも、考えてみたら、今でも血をインクがわりにしてる印刷屋さんもありますなあ」
「そんなんあるか？」
「血判印刷いうて」
「怒られるで、おまえ。一方、吉良家では、いつ赤穂浪士の襲撃があるかもしれんちゅうて、屈強な武士を集めて屋敷を警護していた。赤穂浪士たちは、蕎麦屋やら酒屋、笹売りなんかに変装して吉良邸の情報を収集した」
「あキラめの悪い連中やな」
「それでも、なかなか屋敷の内部の様子はわからんかったが、やっと絵図面が手に入り、元禄十五年十二月十四日の夜、雪が舞う中を、ついに吉良邸への討ち入りが決行された。大石が打ち鳴らす山鹿流の陣太鼓に乗って、四十七人が手に手に武器を持って屋敷に侵入。苦闘のすえ、明け方近くに、やっと吉良の首をとった」
「うわあ、やったあ。大成功！　これで四十七士は時の人ですな。テレビに出たり、本を書いたりして、一生食うには困らんわ」
「ところが、四十七士は全員切腹させられたんや」
「ええっ、何ででんねん。主君の敵討ちをしたえらい連中ですがな」
「ところが、彼らのしたことは幕府の決定に対する反逆やということで、正式な敵討ちとは認められんかったんやな」
「うーん、納得いきまへんわ」
「しかし、世間は大喜びしたな。傲慢

# RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

## 第12回:創作落語『宇宙臣蔵』

な幕府の不公平な判決に対して、地方の浪人たちが喧嘩を売って、りっぱに勝ったわけやからな。死んでからも四十七士は大人気で、芝居にもなったんや。『仮名手本忠臣蔵』ちゅうてな。この芝居の中では、実名を使うのはいかんということで、大石内蔵助は大星由良之助（おおぼしゆらのすけ）ちゅう名前になっとる。吉良は高師直（こうのもろのう）という名前になってるけど、ものすごい悪役や」

「吉良はキラわれものや」

「芝居だけやないで。講談、浪曲、落語、映画、テレビ、小説……あらゆるジャンルに忠臣蔵は取り上げられとるんや」

「ああ、そういえば、赤穂義士のことを書いた本が中国にあるらしいでんな」

「何やそれ」

「義士倭人伝いうて」

「それを言うなら魏志倭人伝やろ」

「四十七士が切腹したことを書いた、義士は死んでん、とちゃいまんの？」

「ちゃう。……これが、忠臣蔵のあらましや。わかったか」

「へえ、だいたい飲み込めました」

「ほんまかいな」

「しゃあけど、それが、なんで『忠臣蔵』って言いまんねん」

「何？」

「いや、忠臣蔵のストーリーはだいたいわかりましたけど、なんでタイトルが『忠臣蔵』いうんですか。忠臣蔵いうのはどういう意味ですか。別に、バイア蔵でも、猫まっし蔵でもええやないですか。なんで忠臣蔵なんですか」

「そ、それはやなあ……」

「あんた、えらそうにしゃべってましたけど、知りはらしまへんの」

「そんなことはない。つまり、なんで忠臣蔵というかというとやなあ……」

「はよ、言うとくなはれ。さあ」

「うーん……」

「さあ」

「うーん……」

「さあ、さあ、さあさあさあさあさあ……」

「やかましわい。これはな、徳川家康以来盤石の体制を築いてきた中央集権の幕藩体制が揺らいだということを象徴しとるんや。わかったか」

「はあ？」

「中心がグラッと揺らいだから中心グラやないか」

「あんたのほうがべたやがな」

「ほな、えらい長い前振りになったけど、おまえにやらせたい小遣い儲けの話に戻るで」

「え！　その話、まだ続いてましたんか。わたいはもうとっくに終わってたんかと。たぶん、読んでる人も忘れてると思いまっせ。だいたい、こんな長いエッセイかなんかわからんようなもん、もう誰も読んでないかも……」

「そんなことどうでもええねん。ようこそ聞きや。実はな、わしの出入り先の大店（おおだな）……ほら、おまはんも知ってるやろ、かに料理専門の〈かに暴落〉はんや」

「ああ、蟹座にある……」

「そうそう。あそこの若旦那いうのが昔から忠臣蔵マニアでな、赤穂とか大石という言葉を聞いただけで震えがくるちゅうぐらいの大ファンなんや。忠臣蔵に関係あるもんやったら何でもコレクションしてはって、どんな高い値がついても買いはるんや。家の中は、大石の家の庭にあっ大石とか浅野大学が行ってた大学の入学案内とかお軽を噛んだライオンの剥製とか寛平が履いてたマラソンシューズとか……そんなしょうもないもんでいっぱいや」

「最後の二つはちょっとちゃうような気もしますけど」

「毎日、朝起きたら、仏壇に向かって、浅野内匠頭の霊をとむらい、それから、吉良上野介の悪口をさんざん言い

# RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

## 第 12 回:創作落語『宇宙臣蔵』

倒してからでないと朝飯を食べんのや」
「よほど変わった人ですな」
「それがそれだけですまんことができたちゅうのが、若旦那、忠臣蔵好きが高じて、とうとう霊が憑いてしもうたんや」
「何ですて？」
「霊や。大石内蔵助の霊が憑依してしもうたんや。一週間ほど前にな、突然、体ががたがたっと震えて、気を失ってしもうたんで、えらいこっちゃえらいこっちゃと奉公人や出入りのもんまで大騒ぎしてたら、医者の治療でやっと気がついたんやが、『わしは、大石内蔵助じゃ。この男の身体を借りて、蘇った』てなことを口走るようになったんや」
「頭がおかしなっただけとちゃいまっか」
「それがやな、これまでそんなことは全くしたことがないのに、和紙に筆で見事な文字をさらさら書いたりするんや。それを歴史学者に鑑定してもろたら、まちがいなく大石の筆跡やそうや」
「憑依文字で書いたわけですな」
「その洒落はなかなか高級やな」
「しかし、憑依とか生まれ変わりとかいうのはほんまにありまんねんなあ」
「英語ではリーインカーネーションいうねん」
「ああ、なるほど。昨日がちょうど五月九日、母の日ですわ」
「その洒落は低級やな」
「わたいは何をしたらよろしいんです」
「その若旦那に乗り移った大石が、どえらいことを言い出したんや」
「へえー、それはどえらいことですなあ」
「まだ何にも言うてないがな。その霊の言うには、吉良上野介は討ち入りの時に死んどらんかったらしいんや」
「はあ？」
「吉良側では、四十七士の討ち入りがあることぐらいとうに予想しとって、あの時、吉良邸で首をとられたんは替え玉やったらしい。吉良は、上杉家に引き取られて安穏と暮らしとったみたいやけど、あまりに世間に忠臣蔵が評判になって、義士の名が高くなり、吉良の評判は逆に地に落ちとるやろ。いまさら『生きてました』とは言いだせんようになってもうたんやな。それに、もし、生きとったのがばれてみい。今度こそ、首をはねられるで。というわけで、吉良は、上杉の屋敷に引きこもったまま、息をひそめてずーっと過ごしとったんやな」
「死ぬまで屋敷から出んかったわけでんな」
「ところが、や。大石の霊はもっとすごいことを言い出したんや。吉良上野介は、まだ死んどらん、と」
「は？」
「は、やない」
「ひ？」
「ひ、やない」
「ふ？」
「ふ、やない」
「へ？」
「へ、やない」
「ほ？」
「もうええわ。いつまでやっとんねん。ある時、上杉家を訪れた南蛮人がな」
「ああ、甘酸っぱい鳥の料理でっしゃろ。あれ、好きや。ビールにぴったりですな」
「何を言うとんねん」
「バンバンジー」
「ナンバンジン。何を聞いとんねん。西洋の人間いうことや。その南蛮人が、冷凍睡眠装置を上杉の殿様に献上しよったんや。この中に入って、身体を凍らしたら、いつまでも永久に生きてられます、いうてな」
「冷凍睡眠装置？　そんなもん、あの時代にありましたんか」

# RAKUGO THE FUTURE

## 第 12 回:創作落語『宇宙臣蔵』

文:田中啓文

「あったらしい。南蛮には何でもあったんや。高島屋も南海電車もグランド花月も蓬莱の本店もりくろーおじさんの店も……」
「そら、ナンバや」
「おまえだけにぼけさしとったら損やからな、ちょっとぼけてみたんや」
「はよ、話を先に進めなはれ。はよせな、みんな飽きてしもて、読まんようになりまっせ。いや、もう誰も読んでないかも……」
「おまえが心配することやあらへん。ガイナックスのＳ君が心配したらええんや。……それで、話は戻るけどな、上杉家では全身凍りづけにするやなんて怖いいうて、誰も冷凍睡眠装置に入ろうとせんかったんやが、吉良上野介は、討ち入りに怯えていつまでもびくびく生きとるよりは、冷凍睡眠して、赤穂浪士のことなんか誰も覚えてないような時代に目を覚まして、気楽に暮らしたい、というて、その装置を使いよったんや」
「吉良だけに、キラくに暮らしたいわけですな」
「で、その上野介が目を覚ましよったんが、つい数年前らしい。つまり、上野介はまだ生きとるわけや。そのことに気づいてびっくりぎょうてんしたんが、霊界の四十七士や。せっかく主君の仇を討ったゆうてヒーローになってええ気分で暮らしとったのに、突然、あれは替え玉でした、吉良はまだ生きてます、と言われてみ。いっぺんに物笑いや。そこで、大石が若旦那に憑依してな、吉良を討ち取ろうというわけや」
「大石一人でですか。四十七士全員が蘇ったらええのに」
「ところが、霊界の掟で、復讐のために憑依する場合は、力に見合うた人数しかあかんらしいわ。なんせ、相手はよぼよぼの老人やで。四十七人で取り囲んだら、そら勝てるわなあ」
「なるほど」
「しゃあから、今回は、大石一人で仇討ちをやらなあかんねや」
「いやー、驚きましたな。吉良がまだ生きとったやなんて、こらまるで、あの……ほら……何て言いましたっけ」
「何がや」
「ほら……ほれ……あの……」
「何が言いたいねん」
「あの……その……ここまで出かかってまんねんけど……覗いてもらえます？」
「そんなもん覗いたかて見えるかいな」
「あの……ほら……アボリジニですわ」
「アボリジニ？　それは、オーストラリアの原住民やないか。それがどないしてん」
「いや、そんなんちゃいますわ。ええっと……溺れ死に」
「アボリジニと溺れ死に。えらいちがいや。その溺れ死にがどないしてん」
「溺れ死ぬことをむずかしい言葉で言うたら何と言います？」
「そやな。まあ、溺死かな」
「そいつや！　そいつや！」
「大きな声を出して、どないしてん」
「溺死シミュレーションいうやつですな」
「それを言うために、人をオーストラリアまで連れていったんかい。それも言うなら、歴史シュミレーションや。溺死と歴史、全然関係あらへん」
「でも、溺れるもの、久しからず、言いまっせ」
「言わん」
「溺死者の国で流れる音楽は溺死ランドジャズ」
「先、行ってええか。それでやな、ここに問題があるというのが、吉良の居場所がわからんのや」
「上杉家とはちゃいまんのん」
「あれから四百年以上たっとるんやで。そんなもんあるかいな。上野介は、冷凍睡眠から覚めたあと、もう誰も自分

# RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

## 第 12 回:創作落語『宇宙臣蔵』

のことを知らんやろ思て安心しとったら、何のことはない。テレビでも映画でもむちゃくちゃ有名や。しかも、自分が徹底的に悪者にされてる。こらあかん、思て、吉良は姿を隠しよったんや」
「キラわれ者やから、しかたおまへんな」
「その洒落、さっきも聞いたで。二番煎じはやめんかい」
「でも、煎じるものは救われる言いまっせ」
「口のへらんやつやな」
「しゃあけど、吉良もびっくりしましたやろな。江戸時代に生きとった思たら、いきなり歴史を飛び越えて未来世界や。その間に起こったことは何にも知らんわけでっしゃろ」
「そらそうやな」
「黒船来航も大政奉還も大正デモクラシーも太平洋戦争も……」
「そうそう」
「SF マガジンの創刊も」
「そうそう」
「神戸の震災もオウム事件も」
「そうそう」
「エヴァンゲリオンのヒットも」
「そうそう」
「日本沈没も中国沈没もアメリカ沈没も」
「そうそう」
「第三次世界大戦の勃発も」
「あれは大惨事やったな」
「第四次世界大戦も第五次世界大戦も第六次世界大戦も第七次世界大戦も第八次世界大戦も第九次世界大戦も第十次世界大戦も第十一次世界大戦も……（以下略）」
「そうそう」
「あんた、わたいが必死で言うてんねんから、そうそう以外にもうちょっとリアクションしなはれ」
「とにかく、おまはんの役目ちゅうのはやな、吉良邸がどこに移ったか、それを探り出すことや」
「そんなもん、その若旦那が探りにいったらええやおまへんか」
「ところが、若旦那は大石の霊に取り憑かれて、見る影もなく痩せ細ってしもたんや。医者の見立てでは、こら、薬では直らん。この霊の言うてるように、吉良邸を探し出して、首尾良う吉良を討ち果たしたら、ご病気全快まちがいなし、とのことや。親旦那やおかみさんがご心配なさってな、出入りのもん集めて、吉良邸がどこにあるか探しに行け、と、こないや。わしも呼ばれて、探しにいかなあかんことになったんやけど、おまえに小遣い儲けさせたろちゅう親心や。どや、この仕事引き受けんか。わしが行ってもええねんけど、最近、ちょっと足の具合が悪いさかいな。頼むわ」
「そんなこと言うたかて……」
「引きうけんつもりか。ああ、わかった。おまえにはこないだえらい立て替えをしてあるはずや。あの金、すぐに返してもらおか」
「それとこれとは話がちがう」
「何にもちがわん。はよ、行きなはれ」
「行かんことはおまへんが……なんせ吉良の顔もわからんねやさかい……」
「わからん、というたかて、ヒューマノイドやろ」
「そらまあそうだっけど……しゃあけど、宇宙も広おまんがな。吉良邸探せ言われたかてどこをどう探してええやら……」
「吉良吉良星よ……言うから、この星の海のどこかにはあるはずや」
「そんな無責任な」
「これからすぐに太陽系中探しなはれ。太陽系探してわからなんだらアルファ・ケンタウリ、アルファ・ケンタウリでわからなんだらアルタイル、シリウス、フォーマルハウト、アルデバラン、カノープス、デネブ……今は宇宙中縦横十文字に道がついたあんね

# RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

## 第 12 回:創作落語『宇宙臣蔵』

ん。これを首尾よう探しだしたら、親旦那がほっとくかいな。若旦那の命の恩人やちゅうて、たいへんなお礼をくれるで。それとは別に、わしも、おまえに貸したこないだの立て替え、全部棒引きにしたろ」
「うわあ、すごいことなってきたな」
「さ、ここに草鞋が五足ある。これを腰へくくりつけといたるさかい……」
「なんで今時草鞋があるねん」
「行くか行かんのか」
「行きます行きます。こうなったら足の続く限り、吉良邸を探して探して探し抜きますわ。しかし、こういう宇宙時代に忠臣蔵をやる、いう SF が昔あったような気がしまんねんけど」
「そら、おまえ、豊田有恒先生の『地球のおめ……」
「待った！　それ以上言いなはんな！」
「何でやねん。何大きな声出してるねん。豊田有恒先生の『地球のおめ……」
「こら、あんた何を考えてますねん。ここは品位あるガイナックスのホームページでっせ。そんな下ネタを……」
「何が下ネタやねん。だから、豊田有恒先生の『地球のおめ……」
「もうよろしわ。あんたがそんな下品な人間とは知らなんだ。ほたら、行ってきます」

　というわけで、この男、吉良邸を探しに旅に出ました。

「甚兵衛はん、ただいま」
「お、帰ってきよった。どやった、吉良邸のほうは」
「いやもうしんどうて……お茶一杯くんどくなはれ」
「ほら、これ飲め。で、見つかったんか、吉良邸は」
「見つけました。まちがいおまへん」
「ようやったなあ、おまえ。どこや、吉良はどこにおるんや」
「サンリオ星です。吉良はあそこにいてました」
「サンリオ星？　なんでそんなとこに……」
「吉良邸に関するわたいの推理がぴったり的中したんですわ。ほら、キティちゃんのグッズばっかり身につけてる女をキラティー言いますやろ」
「そらキティラーや。おまえ、それだけの推理でサンリオ星まで行ったんか」
「いや、もう一つたしかな根拠がありましてん。ほら、キティちゃんと並ぶサンリオのキャラクター、キキララいうのんいてますやろ。あれ、キラいうのを倍にしただけでんがな。二つも証拠がそろたらもうまちがいないと思いまして、さっそくサンリオ星に行ったところ、これがどんぴしゃりでした」
「ほ、ほんまに吉良がおったんか」
「いてましたで。わたいが行ったときは、バッドばつまるのぬいぐるみ着て、ショーやってました」
「ほんまかいな。私が吉良です、いうて名乗ったんか」
「追われる身ですさかい、名乗ったりはしません。でも、まちがいなくあのお爺さんでっしゃろ。休憩時間にちょっと話したんですけど、なかなかええお爺さんでしたで。お茶も出してくれはりましたし、お茶受けに、いうて、京都の名産雲母漬け（きららづけ）も小皿に入れてくれはりました」
「ああ、小茄子を麹（こうじ）に漬けたやつやろ。あれ、うまいんや」
「どうです、これでそのお爺さんが吉良上野介やということがわかりましたやろ」
「どういうこっちゃ」
「吉良上野（きらこうずけ）だけに、雲母（きらら）の麹漬け（こうじずけ）を出しました。どんどん」
「こら、何がどんどんや。あ、おまえ、話がむちゃくちゃになって収拾つかんようになっとるんちゃうか」

# RAKUGO THE FUTURE

## 第12回:創作落語『宇宙臣蔵』

文:田中啓文

「そんなことありませんけど……どんどん」
「どんどん言うたら終われる思たら大間違いやで」
「そら困ったなあ……どんどん」
「若旦那のほうはどないするつもりや」
「そんなこと言うたかて、これ一日で書いてまんねんで……どんどん」
「そんなん読者は知るかいな。おまえが悪いんじゃ」
「読者て、こんなわけのわからんもん、みんなあきれて途中で読むのやめてますって……どんどん」

わあわあ言うております。おなじみの「宇宙臣蔵」、半ばで失礼させていただきます。